

国指定史跡・日本100名城 46番

ながしの
長篠城

(愛知県新城市)



長篠城全景（対岸より）

長篠城は三河国の東端、遠江国との国境地域に位置し、交通の要衝として戦国大名たちが争奪戦を繰り広げました。また、天正3年（1575）には、日本史上有数の戦いである「長篠・設楽原の戦い」がこの城を巡って勃発しました。

城跡は昭和4年（1929）に国の史跡に指定され、さらに平成18年（2006）に日本城郭協会により日本100名城に選定されています。

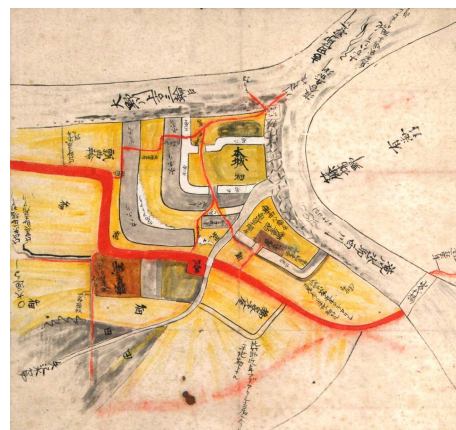
長篠城の特徴

後堅固の城

長篠城は宇連川（大野川）と豊川（寒狭川・滝川）が合流する地点に築城されており、南・西の二方向を急峻な崖に守られた「後堅固の城」となっています。その一方、平坦地である北・東側には曲輪や土塁・堀を複数配置しており、防御力を向上させていることがわかります。

土塁と内堀

長篠城主郭の北東部には巨大な土塁と堀が残されています。土塁は高さ約5m、長さ約80mに及び、横矢掛りを意識した屈曲がみられます。土塁に沿って幅10～15m、深さ約6mの堀が残存し、いずれも武田氏の侵攻に備え徳川氏により改修されたと推定されています。



長篠城絵図（天明年間）



長篠城土塁と内堀

長篠城の歴史

築城～今川時代

長篠城は永正5年(1508)、駿河・遠江を支配し、三河にも進出していた戦国大名・今川氏の城として、国人である菅沼元成が築城したと伝えられ、代々菅沼氏の居城となっていたとされます。永禄3年(1560)、今川義元が桶狭間の戦いで討死すると、今川支配下の三河は動揺し、その間隙をついて松平元康(徳川家康)が台頭しました。家康は長篠城を包囲攻撃し、今川氏側も兵糧を長篠城に入れるなど応戦したものの落城、城は家康の手に落ちました。

徳川と武田による争奪戦

長篠城攻略後、家康は三河・遠江の平定を進め、永禄12年(1569)、今川氏真を遠江掛川城で降伏に追い込み、今川氏を滅亡させました。しかし、甲斐・信濃を支配しており、今川領であった駿河を攻略した戦国大名・武田信玄との関係は悪化していきました。信玄は家康領内の国人の切り崩しを行い、その結果長篠城は信玄に味方することとなりました。その後信玄は家康領へ侵攻し、三方原の戦いで家康を破ると、野田城(愛知県新城市)を開城させるなど三河攻略を進めましたが、体調を崩し長篠城で療養ののち甲斐へ撤退を開始し、その道中で死去しました。

信玄の死去により家康は失地回復を企図し、長篠城を攻撃しました。信玄の後継者となった武田勝頼は配下の諸将に救援を指示したものの、火矢を用いた家康の激しい攻撃により長篠城は降伏開城、城には武田軍に従い退去した菅沼氏にかわって、家康配下の城番が配置されました。

「長篠・設楽原の戦い」と長篠城

天正3年(1575)、家康は三河国人である奥平信昌を長篠城主に任じるとともに、破損していた城の修復を行い、兵糧を入れ置くなど、勝頼の侵攻に備えていました。同年5月、三河へ侵攻した勝頼は15,000の兵を率い長篠城近くの医王寺山に本陣を構え、向城として城の対岸に砦を築いて嚴重に城を包囲しました。武田軍は野牛曲輪、弾正曲輪、瓢曲輪などを次々に攻撃し、500の城兵は鉄砲で応戦するなど果敢に抵抗しましたが、寡兵のため落城は免れないとし、鳥居強右衛門を家康のもとへ派遣し、援軍を要請しました。

強右衛門は使者の役目を果たし、家康と織田信長の援軍は長篠付近の設楽原に布陣しました。勝頼は城の包囲を解き、設楽原で織田・徳川連合軍との決戦に及びますが、多くの将兵を失う大敗を喫し、撤退していきました。長篠城は落城の危機を免れ、城主の奥平信昌は信長や家康から激賞され、名を上げました。

長篠城は戦い後、16世紀後半～末期にかけて廃城になったと考えられており、城の建物の一部は新城城や吉田城に流用されたといわれています。

《長篠城跡へのアクセス》

所在の場所:愛知県新城市長篠字市場22-1 周辺

公共交通機関:JR 飯田線「長篠城」駅下車 徒歩約8分

自家用車:新東名高速道路「新城」IC から国道151号経由で約5分

《お問い合わせ》

〒441-1634 愛知県新城市長篠字市場 22-1 新城市長篠城址史跡保存館

TEL・FAX 0536-32-0162 E-MAIL hri-hozonkan@city.shinshiro.lg.jp (火曜・年末年始休館)